

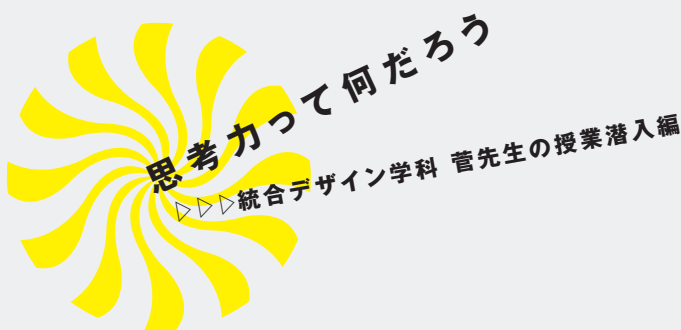
多摩美術大学美術学部統合デザイン学科の学びがめざすもの。それは、社会や産業を構成するさまざまな問題を生活の営みから発見し、それらを論理的に分析した上で視覚化して伝える力と、ものとして具体化し実在させる能力に長けたデザイナーを育てること。このような力を身につけるためには、物事の本質を観察し、分析できる思考技術の訓練が必要だという。

デザインについて「装飾とか見た目を作ることだとイメージされがちですが、その本質にあるのは、社会や生活の中にある問題を解決するための考え方なんです。だから社会に新しい問題が出現するたびに、新しいデザイン領域が出てきます」と指摘するのは、多摩美術大学美術学部統合デザイン学科の菅俊一講師。菅講師の授業では、世界をどのようにとらえ、どのように見るかという「観察する力」と「考える力」を鍛えることを主眼に置いている。「クリエイティブティは才能によるものだと思われがちですが、創造性を成り立たせているのは思考の技術です。技術であるということはつまり、トレーニングすることが可能な領域なのです」と語る菅講師の、ワークショップ形式で展開される1年生の授業「インターフェース基礎」に潜入取材した。



クリエイティブティを引き出す 「思考技術」のトレーニングで 未来社会を先導する

多摩美術大学



美術学部統合デザイン学科1年生の授業「インターフェース基礎」の課題の一つに「世界の中から構造を発見する」というものがある。これは、身の回りの環境について、「構造（仕組みや組み立て）」という視点から観察する経験を通じて、「新

しい物の見方」を手に入れることを目的としたものだ。社会や身の回りの環境を「構造」という視点によってとらえられる力を身につけることで、見た目や印象といった先入観にとらわれ

物事を「構造」でとらえ、 デザイナーにとつて重要な 「観察力」を鍛える

授業ではまず、学生にかばんの中身をすべて取り出し、並べさせる。その際、財布やポーチ、さらにその中身に至るまで、す

べての物の包含関係を観察し、どこにどんな物が入っているかをできるだけ細かく記録する。次に、記録した物の配置を正確に

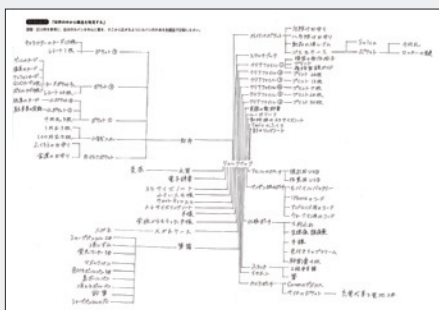
木（ツリー）構造によって図式化し、これと対比するため、かばんの中身を整理して写真を撮る。最後に描いた図を観察し、物の配置の特徴を考察した。どこに何が入っているか、物の配置を図式化することにより、物の位置関係という「構造」だけを取り出すことができる。

「かばんの中身の構造を取り出す」ということは、個別の要素を捨てて、「仕組みや組み立て」だけに着眼することです。別の言い方をすると、かばんの中にある物の位置情報を記録するということ。図式化することによって、どこに何が入っているかを可視化することができるのです」

がある。その状況を構造から分析すると、左図の中央から出ている線の数が多いことから、かばんに直接いろいろな物が詰め込まれている状態であることがわかる。つまり、かばんの中を

ガサゴソ探るといえるのは、左図の中央から出ている大量の線の中から一つを選び取るということになる。もし、間にポーチ等があれば線の数も減るため、選び取る際の線の数も減る。だから結果として物を探しやすくなるということがわかる。

「構造を取り出すことも、『観察』の方法の一つです。何かを観察するときは、ただそれを見るだけでなく、別の形に変換して、違った角度からものを見るのが重要です。複雑なものには、できるだけ分解することで理解しやすくなります。プロセスを分解することもあれば、時系列に分けたり、要素で分類すること



ワークショップ「インターフェース基礎」課題「世界の中から構造を発見する」

菅 俊一
 多摩美術大学美術学部 統合デザイン学科専任講師
 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修了。
 研究者、映像作家。1980年東京都生まれ。2003年
 慶應義塾大学環境情報学部卒業、2005年慶應義塾
 大学大学院政策・メディア研究科修了。
 2014年までビーブル株式会社にて、乳幼児向け知育玩
 具の企画開発に携わる。人間の知覚能力に基づいた
 新しい表現の在り方を研究し、現在Eテレで放映中の
 「2355」など、映像や展示、文章をはじめとしたさまざ
 まな分野で活動を行っている。2012年にD&AD Awards
 イエローペンシルを受賞。主な著書に「差分」(2009年、
 美術出版社、佐藤雅彦、石川将也との共著)、「まなざし」
 (2014年、ポイジャー)など。2014年より統合デザイン
 学科専任講師。



デザイナーには常に新たな 「ものの見方や考え方が」 求められる

もある。今回のように図式化す
れば、構造という情報だけを取
り出すことができる。物事を構
造化して理解することができる
と、私たちが普段無意識に行っ
ていた行為の理由を知ることが
できるようになります」

物事の仕組みや組み立てを示
した「構造」という視点でとら
えていくと、かぼんの中から無
意識に物を探すとどう何気ない
行為も、どういった判断や選択
を経て行われているのか理解で
きるのだ。

「どんな分野でも、プロフェッシ
ヨナルというのは再現性がなく
てはならない。特にデザイナー
という職業において、常に良い
ものを生み出し続けるためには、
なぜそれが良いのかを理解し、
説明できる力が必要です。そこ
には冷静に現実を分析する思考
や、客観的に物事をとらえる視
点が必要になってくるのです」

新しい知識を学び、表現や体
験に触れたときに、そこに潜ん
でいる考え方や概念を取り出す
ことができれば、別のものに応
用することが可能になる。

「例えば、あるものについて「面
白い」と評価する際には、どこ
から「面白い」のかという境
界線となっている要素がありま
す。その要素を暴いて使いこな
せるようになれば、自分で面白
いものをどんどん創り出せるよ
うになるはず」

「それが、リファレンスすると
いうことの本当の意味なのです。
人類の文明はこれまで、自然や
先人たちの工夫などを(参考)に
し、一歩進めたものを作ると
いうことの繰り返しで発展して

きました。その積み重ねのプロ
セスこそが知性の賜物にほかな
らないと思っています。そして、
この知性が最も表れるのは、目
の前にあるものの本質をつかみ、
自分なりに利用して応用するこ
となのです」

「たとえば、いま、ここで『赤
いもの』を探してくださいと言
われた瞬間に、それまで当たり
前のものとして風景に溶け込ん
でいた『赤いもの』が突然目に
入ってくる。このように私たち
の視点は、意識した瞬間に見え
る世界がさまざまに変化します。

統合デザイン学科で学ぶ考え方
や知識というのは、世界を別の
視点で見るところにあるのです。
こうした「観察力」が身につけ
ば、自ずと人と違う視点でもの
を見たり、考えたりできるよう
になるでしょう。デザインにお
いては、観察から問題を見つけ
出してそれを分析し、考察する
力が非常に重要となるのです」

2018年度 美術学部 統合デザイン学科 推薦入学試験

公募制推薦方式(学校長推薦が必要)

実技試験を行いません。

- 募集人員：12名
- 出願期間：2017年10月16日(月)～10月25日(水) [郵送必着]
- 試験科目・日程
 - ・小論文(問題解決型)(3時間) …11月11日(土)
 - ・面接…11月12日(日)
- 提出物(合否判定に用いる)
 - ・外部英語試験の試験結果[※](コピー)
 - ・自己アピール書類(A4サイズ書式・枚数自由。文章と図や写真を用いて自己アピールするものをまとめる)
- 合格発表：2017年11月16日(木)

※2015年12月以降に実施された『実用英語技能検定(英検)』(1級～準2級に限る)、『TOEFL iBT[®]』、『TOEIC[®] Listening & Reading Test』、『TOEIC[®] Speaking & Writing Test』、『TOEIC Bridge[®] Test』、『IELTS[™]』のいずれか。

推薦入学試験の合格者については、選考結果によって募集人員に満たない場合があります。

2018年度より、一般入試でも実技試験を行わない「センターII方式」(センター試験の国語・数学・外国語の成績のみで評価)を実施します。

入試の詳細については「2018年度学生募集要項」でご確認ください(変更の場合があります)。

多摩美術大学
 〒158-8558 東京都世田谷区上野毛3-15-34
 Tel.03-3702-1141(代表) Fax.03-3702-2235 http://www.tamabi.ac.jp

